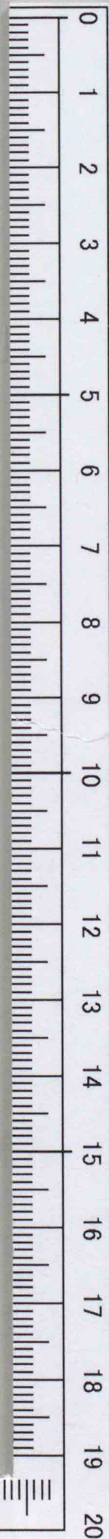


中等國文讀本  
落合真文編  
卷三

3759  
Oc8  
資料室



30302

教科書文庫

3

810

41-1899

20003  
01457

M32

1897

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

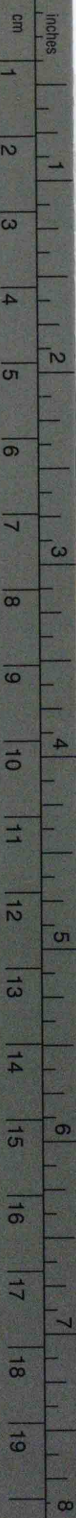


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.4  
0.8

廣島大學  
圖書印



中等國文讀本卷三目次

忠孝  
 氏神  
 祖先の祭祀  
 神武天皇 その一  
 神武天皇 その二  
 神武天皇 その三  
 尙武の風 その一  
 尙武の風 その二  
 詠史の歌

松平樂翁  
 山崎美成  
 松平樂翁

久米幹文

高橋殘夢等

武夫  
 長篠  
 殊勝なる武者振  
 東照宮敵將の死を惜む  
 眞の勇者  
 勇將琵琶に泣く  
 盲目  
 文盲  
 讀書眼  
 史論  
 鎌倉

本居 豐穎  
 湯淺 常山  
 室鳩 巢  
 成島 司直  
 那珂 通高  
 室鳩 巢  
 松平 樂翁  
 柳澤 淇園  
 滋野 貞融  
 久米 幹文  
 橘南 谿

波蘭懷古  
 墳墓  
 奢侈は禍亂の原因  
 儉約  
 富貴  
 細き烟  
 修業論  
 毀譽  
 不言の教  
 板倉重宗  
 江戸時代風俗の變遷

松平 樂翁  
 雨森 芳洲  
 高田 與清  
 本居 宣長  
 堀秀 成  
 松木 直秀  
 三浦 安貞  
 藤井 高尙  
 新井 白石  
 太宰 春臺

風流  
酒戒

松平樂翁  
松平樂翁



中等國文讀本卷三

忠孝

松平樂翁

父母に孝をつくし、君に忠をいたすことをいふに、  
今、この衣食、一日の生を全くするは、則ち、君の惠な  
り。いかで、忠を盡さざるべき。わがこの身あるは、父  
母の恩なり。いかで、孝を盡さざるべきといふ。こは、  
もとよりのことなれども、かくいふは、あさかりけ  
り。只、臣となりては、おのづから、忠ならざること能

はず。子となりては、おのづから、孝ならざること能はず。惠よ恩よと、よそに目をつけて、なすべきことにはあらず。恩惠に報ぜむとするは、道ゆく人も、かたみになすことなり。我子、我孫は、血を分けたるものにて、父母のかたみなればとて、ことわりつけて、慈愛するものにはあらず。何の理もなく、ただ、子を見、孫を見ては、慈愛せざるに志のびず。殊に、いはむや、君父の恩惠、海よりも深く、山よりも高ければ、いかで、我身をわが物とせむ。(花月亭筆記)

氏 神

山 崎 美 成

りぶすなの神社を、わが氏神なりと心得たるは、あやまりなり。こは、いつの頃よりか、いひならひけむ、臥雲日件録に、世人、以テ神明主ヲ于ニ我所生之地ニ謂フ之ヲ氏神ト見えたれば、近きことにもあらざるべきか。もと、氏神といふは、藤原氏の、春日明神を祭るがごとく、わが氏の神をいふなり。伊勢物語に、むかし、二條の後、また、春宮の御息所と申しけるに、氏神にまうで給ひけるといふことあり。これは、大原野の社を

いへり。古今和歌集には、すでに大原野にまうで給ふと書けり。藤原氏の氏神は、春日明神なれども、京よりは、道のほど、いと遠ければ、仁明天皇、嘉祥三年に、閑院左府の、はじめ、平安城大原野に勸請ありて、ながく、王城、ならびに、藤原氏の守護神とは、志給ひしよしなり。吾妻鏡に、平家の氏神といふこと見ゆ。これは、平野の社といへり。また、源平盛衰記に、八幡の神の、松名を護り給ひしところなれば、神護寺と名づけたり。故に、この寺は、和氣の氏寺なりとあり。

り。神社のみならず、氏寺もありと知るべくなむ。

(世事百談)

祖先の祭祀

松平樂翁

人は、祖にもとづき、萬物は、天地に本づきて、生ずるものなり。先祖なくば、いかでか、父母あらむ。父母なくば、この身あるべけむや。されば、生ける時に事へて、誠を盡し得ざるが故に、祭祀の禮あり。祭祀の禮は、人道の本なり。ここに於て、誠を盡さざるときは、人道かく。たとへば、父母先祖は、木の根幹の如しも

るもろの枝葉花實は、伯叔、父姑、兄弟、從兄弟、その外の諸親類、子孫の如きものなり。その木の根に土かひ、水そそぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉花實、時に去たがひ、茂りさかゆるなり。もし、その根のくつろぎゆるぐにも、土かはず、水そそかずして、捨て置くのみならず、剩へ、そのほとりの土を掘りのけ、根を押し動かす時は、或は、大風に吹き倒され、或は、炎暑に枯るるは、必然の事なり。枝葉ばかり大切に、して、それに水そそぎた

りども、その根本かれたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理をからむ。人の、父母先祖に疎なるは、みづから木の根をゆるがして、倒すに異ならず。その根かれば、かすかずの枝葉も、從ひて枯るるは、みな、人の知る所なり。されば、父母先祖にあつくして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。さるに、父母先祖に疎にして、たのむべき筋もなき佛神に媚びへつらひて、子孫の榮えむことを願ふは、道理なき事なり。こをたとへていはば、松の木、茂り榮えむことを求む

とて、梅の木に、土かひ、水そそぐが如し。松の榮えむことを求めば、その根に土かひ、水そそぐに志かず。梅の榮えむことを願はば、その根を養ふに志くはなし。これ、實理にして、志るしあることなり。但し、父母先祖に厚くするは、全く、子孫の繁榮をねがふのみにあらず、本に報ずる微意なり。父祖存生の中に、つかりまつる日を計るに、いくばくもなし。幼にしては、いまだ、事ふる道を盡さず。やや成長しては、力をつくすことを知るといへども、或は、公務に暇

なく、或は、文武のまなび、又は、親戚のまじはり、他人の應對、職業のつとめ等によりて、父祖の膝下にありて、事ふることを得ざる日多し。たとひ、生涯、父母の膝下を離れずして、つかへたりとも、かぎりなき恩をば、報いつくすべしにあらざ。父母、既に、身まかりて後は、悔の八千度もかひなし。故に、歿後には、その神靈につかへて、いますが如く、誠を盡すは、やむことを得ざる至情をつくすのみなり。子孫たるもの、先祖に厚くば、先祖の神靈、悦ばざらむや。さあ



ば、祈らずしても、子孫の繁榮、うたがふべからず。先祖の神靈に、子孫を守らざる神靈あらむや。然るに、愚なるものは、父母先祖の神靈を麓末にして、願ふべき筋もなき神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、ここの神に、かしの佛に、多くの金銀をなげうち、我身、および、子孫の福をねがふは、まどへるなりけり。その金銀を以て、民をすくひ、善事に用ゐるは、いのらざる祈にして、おのづから、その身、および、子孫にも福あるべきことは、必然の道理なり。神は、

非禮をうけずといふに、非禮の祈禱に、多くの金銀をつひやすは、惜むべきことならずや。(燈前漫筆)

神武天皇その一

我國は、神武天皇紀元元年よりかぞふるも、今日までには、はや、二千五百五十八年をへたり。その間、時に盛衰なきにあらざれど、君は、どこしなへに、君とましまし、臣もまた、どこしなへに、臣として仕へまつれり。こは、天つ御祖の神の、御恩頼によることとはいへ、また、皇祖神武天皇の御力によらざるべから

ず。瓊杵尊、火遠理尊、鵜草葺不合尊の三代は、天つ御祖の神の神勅のまにまに、この國民を治め給ひしが、その都たる、西偏にして、いまだ、皇威も、四方にあまねからず。東の方には、八十梟帥、土蜘蛛、戸畔なごいふ酋長ありて、互に争ひ、人をそこなふことも、きはめておほかり。ここに、神武天皇のおほすやう、かかる西偏にありては、いかでか、この國をすべをさむるを得む。この國をすべをさむることを得ずば、天つ御祖の神に對しまつり、なにおもてかあ

らむと、ひとり御心をなやませ給ふも、かしこしや。ある日、諸兄及び、諸皇子に向ひ給ひ、むかし、天つ御祖の神、この國を、皇孫瓊杵尊に授け給へり。されど、時いまだいたらず、この西偏に、あまたの年をへさせ給へり。さては、遠き國國など、いまだ、王化に沾はず。いとなげかはしきことにあらずや。東の方には、青山四周のよき地ありときく。いで、そこに、都を遷さむと思ふはいかにとの給ふ。諸兄、諸皇子、皆それに従ひ給ふ。鵜草葺不合尊の皇子、四人おほし

ぬ。神武天皇は、その最後の皇子にましますを、三人の兄君にこえ給ひて、御位につかせ給へるなど、すぐれたる御さがにましますばならむ。今、都を遷させ給ひて、天業をひろめむとおぼしたたせ給ひしなど、深き御心のおほすることこそ。やがて、日向の宮を出でたたせ給ふ。

筑紫より、安藝の海をすぎさせ給ひて、吉備の國へつかせ給ふ。そこにて、舟楫をそなへ、兵食をたくはへ、かつ、上國のありさまなど、うかがひ給ひて、とど

まり給ふこと三年、遂に、東の方へとすすませ給ふ。かくて、浪速國をへ、河内を過ぎ、さて、そこより、龍田へ赴かむとし給ひしが、路、けはしくして、越え給ふべくもあらざれば、さらに、ひきかへし、東のかたなる、膽駒山をこえて、大和へ入らむとし給ふ。

天神の子に、饒速日命といふあり。はやくより、大和に入り、そこなる長髓彦の女を娶り、子さへ出で來しかば、人人、皆、心をよせてありけり。ここに、天皇の攻め來給ふよしを聞くや、あまたの兵を出だして、

孔舍衛坂に拒ぎぬ。時やいたらざりけむ、地やよろ  
 しからざりけむ、皇軍、いたく、うち負け、皇兄五瀬命  
 は、いた矢をさへ負はせ給ふ。時に、天皇、つくづく、お  
 ぼすやう、われは、日の神の子なり。日に向ひて戦ふ  
 は、あしからむ。これより、背に日を負ひて、敵なすも  
 のをうち平げむと、南の方よりうちめぐりて、紀の  
 國に出でます。五瀬命、いたさを堪へて、ここまでは  
 いでまししかど、はや、一步もあゆませ給ふことか  
 なはず。ここに、劔のつかをとりにぎらせ給ひ、あな

うれたきかな、かかるいた矢を負ひながら、その恨  
 もはらさで死ぬることよと、の給ひて、そのまま、は  
 かなくなり給ひにたり。あはれ、日向の國を出でた  
 たせ給ひしより、天皇には、ただ、この兄君をのみ、頼  
 みきこえ給ひしに、今は、かく、はかなくならせ給へ  
 り。そを見そなはしたる御心のうちはいかに。兄君、  
 またせ給へ、必ず、賊をうちて、この恨をはらしまつ  
 らむとは、この時の天皇の御心なりけむ。

神武天皇その二

名草、丹敷などいふところにも、賊どもの居て、皇軍に射むかひまつりしが、それを皆、うち平げて、さて、大和へ入らむとし給ふ。このあたり、山また山のみ、うちつづき、その路のさかしさ、いふばかりなし。建津身命、よく、路を知りて、導きまつりぬ。道臣命、大來目命など、前驅して、さて、菟田にいたりつきぬ。この地に、酋長二人あり。兄猾、弟猾といふ。弟猾は、従ひまつりしかど、兄猾は、従ひまつらず。ここに、それを誅して、大に、みいづを示し給ひしが、猶、國見岳には、八十梟

帥あり。磐余邑には、兄磯城、弟磯城あり。高尾張邑には、赤銅八十梟帥あり。皆、險をたのみて、皇軍にいわかひまつりぬ。その路のさかしき上に、いづこにも、さるあだどものみありしかば、天皇にも、いたく、御心をいためさせ給ひ、この上は、神の力をえて、それをうちほらはむの外なしとて、天香具山の土をとり、そをもて、八十平登、嚴登をつくり、かくて、丹生の川上なる、きよきところにて、天神地祇をいはひまつらせ給ふ。かの、水なくして、飴をつくらせ給ひしも、

この御時なり。かの、魚みを酔ひて、水のまにまに流  
れゆきしも、この御時なり。天祖の神勅のまにまに、  
天業をひろめ給はむとし給ふこの天皇、天業をひ  
ろめ給はむとて、いくその辛苦艱難をなめさせ給  
ふこの天皇、いかなる神かあはれとおぼさざらむ。  
かくて、八十梟帥を、國見岳に討ち給ふ。彼、忽ちに、斬  
り殺されぬ。天皇、使をつかはして、兄磯城を召す。應  
ぜず。弟磯城のみ降り。ここに、兄磯城を討たせ給  
ひしが、彼、力のかぎり、防ぎまつりぬ。されども、忽ち、

斬り殺されぬ。

八十梟帥、兄磯城の二賊は、はや、たふれたり。この上  
は、長髓彦を討たむとて、そなたぎまに進み給ひし  
に、たやすく、降らず。中ウチ中に、皇軍の危あやかりしことも、  
たびたびなり。一日、戦ウツたけなはなるころ、空、俄にか  
きくもり、氷雨ふりきぬ。いとあやしと思ふ折しも  
あれ、金色の鷄、飛び來て、天皇の弓弭ヒにとまれり。そ  
のひかりかがやくさま、電の如し。長髓彦の軍兵、皆  
眼くらみて、また、戦ふこと能はず。長髓彦、使者をお

こせて、わが方に、天神の御子、饒速日命おはす。きけば、君も天神の御子なりと。天神の御子に、いかでか二種あらむ。怪むべきことにこそといふ。天皇、使者に向ひ給ひて、天神の子、あまたあり。汝が君とするところ、まこと、天神の子ならむには、必ずや、その志るしあらむ。そを見せよとの給ふ。長髓彦、饒速日命の天の羽羽矢、及び、步鞞を見せ奉る。天皇も、天の羽羽矢、步鞞を見せ給ふ。長髓彦、そのみ志るしの著しきを見て、心の中には、いたく、おぢ畏まりたれど、中

ごろにして、兵をやめむことも、なり難かりければ、猶、従はず。饒速日命、はやくも、順逆のあるところを知り給ひて、長髓彦を殺して、参りつかうまつりぬ。天皇、饒速日命の忠義を、いたく、めでさせ給ふ。長髓彦、はや、滅びたれど、土蜘蛛、新城戸畔、居勢祝、猪祝等の土賊、ところどころに集り居て、従はず。されど、おひおひに、兵をさしむけて、そをうち平げ給ひしかば、いくばくもなくして、皆、平ぎぬ。こはこれ、實に、紀元前二年の事どもになむ。

神武天皇その三

辛酉の歳の正月、大倭國畝傍の橿原の地をえらび、都と定め、新に宮をつくり給ひて、天皇の御位には即き給ふ。その式は、まづ神籬をたてて、八神をまつり、かくて、可美眞手命は、内物部を率ゐて、御前に侍り、道臣命、大久米命は、大伴部、久米部を率ゐて、宮門を守り、その儀は、や、備りしかば、天富命は、齋部を率ゐ、天璽、鏡、劍をささげて、神殿にませまつり、天種子命は、天神の壽詞を申す。かくて、四門を開き、人人を

して、そををろがみ見ることをゆるさせ給ふ。

かくて、諸臣の功を定めて、賞を行ひ、また、百官有司の職も定め給ひぬ。ここに、天皇、詔してのたまはく、我御祖の神たち、天にましまして、朕が身を助け給へり。今、その恩頼によりて、天の下も、事なくまづまゐることを得たり。この時に方り、御祖の神たちを祀りて、大孝をのべまつらでやほとて、靈時を、鳥見山の中にたて、さて、天つ御祖の神をまつらせ給ふ。孝は、百行の本なり。その孝を忘れ給はず、かく、御祖の



神たちをまつらせ給ふなど、いかに尊きことならむ。この天皇より、今上天皇まで、六十八世、百二十二代を経たり。その間、皇統連綿として、一すぢの糸をひきはへたらむが如く、たえて、亂るることもなし。こは、これ、深き御ことわりのあるにこそ。さて、即位の年、媛蹈鞞五十鈴媛を立てて、皇后とせさせ給ひしが、その御腹に、御子二人おはしき。神八井耳尊、神渟名川耳尊と申す。神渟名川耳尊、殊に、さかしうおはしたれば、こを皇太子とは定めさせ給

ふ。その後、三十四年ばかりありて、天皇には、橿原宮にて崩じ給ふ。御年一百二十七歳。あくる年の秋、畝傍山の東北の陵に葬りまつりぬ。今の四月三日の神武天皇祭は、即ち、この山陵の御祭なり。天つ御祖の神の御あとをうけ給ひ、以て、仇なすものをうち平げ、かつ、萬世までの御おきてを定め給へるなど、いとも畏き天皇にましませば、國民たるもの、朝夕、その御恩を忘るべからざるは更なり。四月三日の御祭には、ひたすら、この御徳を仰ぎまつりて、いよ

いよ、皇位の無窮を祈りまつるべくなむ。

尙武の風その一

久米幹文

國を守り、世を志づむるものは、武にこそありけれ。かの、神代の昔、天祖の、皇孫に、天位の御璽として、草薙劍を賜へるも、武を旨とせよとの神慮なりけり。されば、代代の天皇、この御心を忘れ給はず、叛者あれば、自ら、兵を帥ゐて討たせ給ひ、或は、皇后、皇子をして討たしめさせ給ふ。故に、大臣、大連も、皆、この心を勵まして、仕へ奉らぬはなく、武官、文官の差別も

なかりき。さて、大伴宿禰、物部連の帥ゐつる八十伴のをの、いよいよ、ますます、ひろがりゆきて、その將帥たるものは、大伴氏の祖のをしへにいへるごとく、山行かば草むす屍、海行かば水づくかばね、大君のへにこそ死なめ、のどには死なじと、言あげし、その兵士たるものは、東人のいへるごとく、額には、矢はたつとも、そびらには、矢はたてじ、かへりみはせじと、言だてつつ、仕へ奉りけむさまは、さこそと想ひやられぬ。當時の兵士は、事をなす時は、その國にあ

りて、農に、桑に、いそしめども、事ある時は、弓、やなぐ  
ひを負ひ持ちて、いづこまでも、御軍に仕へ奉る故  
に、兵と農との差別なく、上は、かしこき天皇より、下  
は、賤き民くさに至るまで、天の下、悉く、兵ならざる  
はなし。これ、わが國の古の體なり。さるを、孝徳帝の  
朝に、隋唐の法をとりて、制をたて給ひしより、官は、  
文と武とを分ち、兵部省を、八省の内に置きて、兵事  
を掌らしめ、天下の壯丁を、四つに分ちて、一つを兵  
士とし、諸國に軍團を置きて、京師の衛士に、邊地の

防人に、さしわけて仕へ奉らしめたり。兵は、五人を  
伍とし、伍二を火とし、火五を隊とし、隊二を旅とし、  
旅十を團とし、火ごとに、馬六匹を畜へしめて、騎射  
をよくするものを、騎兵とし、その外を、歩兵とし、叛  
者あれば、將軍、副將軍を任じ、これを帥ゐて、行きて  
討たしめ、かへれば、その兵器を收めて、兵庫に入れ、  
かつ、勳位十二等を設けて、功を賞するを常とせり。  
ここに、舊き制かはりて、兵と農と、やや、わかれぬ。兵  
士は、僅に、調庸を免ずるに過ぎずして、別に、恩給あ

るにあらねば、頼る、からき役なれども、元來、武になれたる風俗なれば、利徳の有無を問はずして、弓矢をおひ持ち、太刀をはきて、肥えたる馬に乗らむことを好まざるものなかりしなり。

尙武の風その二

さて、聖武帝の御時、天下、まばらく、無事なりしかば、天平十一年五月、敕して、三關の國、又、邊要なる陸奥、出羽、越後、長門、太宰府管内の國國のみは、もとのまゝになしおきて、諸國の兵士はとどむべしと宣り

給へり。されども、この制は、民の心にかなはずして、容易に、行はれざりけむ、やがて、桓武帝の延暦十一年五月、二度、敕して、前の如く、諸國の兵士をとどめよとおほせ給ひ、かつ、韓國と蝦夷とに備ふる外は、いたづらなりとおぼして、兵役にいたづく民をやすめ給へり。されども、昔より、久しく、武を尙べる風俗は、頓に、かはるべくもあらず。また、弓馬になれたるものの、今更に、兵仗をすて、平民と肩をくらぶるを、いかに快からず思ひけむ。又、このころ、朝廷の法

令、よろづ弛み、日に月に、驕奢のみまさりて、國用足らざる故に、下等の官を賣りて、つくなふ事の出で來しかば、さきに、兵をとどめられし富める民は、京に争ひのぼりて、衛府の官を買ひたり。かかれれば、衛門、兵衛、天下にみちたり。さて、名こそは、兵衛、衛門とはいへ、身は、その國に住みて、あらあらしく、民どもを凌ぐ故に、國司、法に勘へて、糺さむとすれば、直に、走りて、京に入り、あるは、徒黨を結びて、國司をさへ脅すたくひ、絶えざりければ、三善清行が封事に、六

軍の猛虎にあらずして、諸國の豺狼なりといへるなり。たまたま、叛者あれば、源平二氏を大將に任じて、家人を率ゐて、討ち平げしめ、又は、二氏のおぼえあるを、鎮守府將軍に任じて、陸奥、出羽を鎮めしめしかば、諸國の兵士、みな、二氏に屬せざるものなく、みづから、家人と稱してはぢとせず。その勢、ますます、いみじくやありけむ、鳥羽帝の御代に、敕して、天下の兵士の、二氏につくをとどめ給ひしかども、世にいふ、隻手をもて、堤のきれたる河水を支ふるに

異ならず。又、ほどなく、保元、平治の亂起りしかば、四方に、兵士を募りて、二氏をして、これを帥ゐて、戦はしむるにいたりては、専ら、兵權を二氏に委ねつるなり。平氏が、兵と政とを左右に握りて、後白河院をたしなめ奉りしかば、院<sub>堪</sub>へ難くおもほして、源氏の兵を召して、平氏を討たしめ給ひけるに、平氏は、亡びたれども、大權の、源氏に移りつるも、ことわりなり。後鳥羽院は、これをうれたくおもほして、兵を召し集めて、鎌倉を討たむと志給ひしに、事破れて、

中中に、大權は、長く、武人にぞ移りはてし。かく、昔より、さまざまに、うつろひ來しこと、のさまを思ふに、これ、ただごとにあらず、古より、武を専らと立てつる國がらなれば、これを尙ぶ心、いや深くして、たやすく、かはるべくもあらぬを、あながちに、隋唐ぶりの令制に、おしはめむと志たりしかば、民の、このころに、かなはず、うつりうつりて、終に、兵と農とわかれざりし時の、もとのさまにかへれるなり。おのづからの勢といふべし。さて、この勢をさとりて、制をた

つるにあらずば、世を志づめ、國を治むる事は、難かるべくやあらむ。(水屋集)

詠史の歌

護良親王

高橋 殘夢

日かげ見ぬ、いはやにいりて、世の中を、

やみなりけりと、なげきましけむ。

楠 正成

大清水 英棟

五月雨に、花たちばなの、ちりしより、

木の下やみと、世はなりにけり。

新田義貞

足代 弘訓

かへり來ぬ、こし路の雁ぞ、あはれなる。

よし野の春の、はなも見ずして、

藤原藤房

鶴園 親義

笠置山、松の志づくに、ぬれしより、

君のたもとは、かわかざりけり。

藤原師賢

村上 忠幹

あそとめて、うらみむものを。玉すだれ、

吹きあげし風の、行へ志らずも。

菊池武時

田中嘉道

つくしがた日かげをおほふむら雲に、

ひとりねをなくほごごぎすかな。

武夫

本居豊穎

額にいたでは、

おはばおへ、

そびらは見せじ、

きみがため。

むかふ野山の、

つゆよりも、

いのちは輕し、

名はおもし。

長篠

湯淺常山

勝頼、長篠の城を圍み攻むること、烈しかりしに、信  
 長、東照宮と共に、後卷（あごまき）にあり。軍評定の時、酒井忠次  
 進み出で、今夜、脇道（わきみち）より、長篠の附城（つけしろ）鳶巢へおし寄  
 せ、攻め破らば、勝頼、必ず、敗北すべしと申しもあへ  
 ぬに、信長、あざ笑ひ、汝は、三河、遠江の小迫合（コヤクワカヘ）には慣  
 れつれど、大軍の計策は、知らざりけりと、嘲（あざわら）られし  
 かば、忠次、いふべき詞なくして、出でける程に、信長  
 東照宮にささやき申されけるは、左衛門尉が申す  
 所、最も、志かるべし。また、呼び出だされよとて、酒井



が側近く居より、誠にゆゆしくも計りたるかま。されど、外に泄れ聞えむかと思ひて、わざと詐りて誹りたり。疾く、馳せ向ひて、鳶巢を攻め破り候へといはれしかば、忠次承りて出でむとする時、又引き止め、同じくは、信長が向ひたき所なり。あたたら、武功を汝に譲れりと申されけり。忠次、大に勇みて、夜半ばかりに、思ひもよらぬ所におし寄せて、武田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部を始め、數多討ち取り、火を懸けたるが、その煙を、武田の軍兵顧みて、大に勇

氣ぬけて、終に、敗北の本となりけりとなり。この夜討に、天野惣次郎は、指物をも差さず、戸田半平は、道遠し、夜あくる事もあらむごとて、指物を持たせけるが、城を焼きたる火の光、白日の如く、天野、戸田、先を争ひけるに、戸田が銀の髑髏ヒツクリの指物、燿き渡りて、人の目を驚しけり。信長、後に、酒井が功を賞して、汝は、前に、眼あるのみにあらず、後にも、眼ありといはれしかば、忠次、忝かたじけなくきよし申して、さては、終に、後を見たることはなく候ふと申しければ、信長、笑ひて、前後

に、謀たがはざるを賞せむとて、いひすごしたりといはれければ、その時、仰の旨、面目ありとて、退出したりけり。(常山紀談)

殊勝なる武者振

室鳩巢

秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功のほまれありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。又、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴歴なりしが、嫡子に鎧の着ぞめせさせけるに、かの掃部を招待して、子に、鎧を着することを、頼みけり。さて、饗膳

新田  
通  
一  
成

いでて、祝の盃に及びし時、伊勢、今日は、愚息が鎧の着ぞめにて候ふまま、御身の御武功の事、御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へといひしに、掃部、いや、某が身の上に、御話し申すべき程の、武功も覺え申さず候ふ。されど、御望もだし難く候ふまま、某、一生の内、武者振の見事なる士を、一人見申して候ふ。その事を話し申すべし。江州、志津が嶽の戦に、暮れ方に、某一騎、余吾の湖のあたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより詞をかけし故、馬を引き返

し候へば、その人申し候ふは、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ。御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ、御不祥ながら、御相手になり申すべしとて、進みより候ふ故、それこそ、こなたも、望む所にて候へと、たがひに、馬を乗り放ち、既に、鎗をあはせむと志けるに、その人、志ばし、御待ち候へ。今朝より、雑兵を多く、突き崩し候ふ故、鎗、よごれて候ふまま、鎗を洗ひ候ひて、御相手になり候はむとて、余吾の湖に鎗をうちひたし、二三遍洗ひつつ、さらば

とて、突き合ひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより、又、詞をかけ、もはや、鎗先も見えず候ふ。御残り多くは候へども、これまでに候ふ。御いとま申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は、青木新兵衛と申す者にて候ふとて、某が名をも承り候ひて、この後、又、陣頭にて出合ひ候はば、たがひに、人手にはかかり申すまじく候ふ。もし又、味方にて候はば、わりなく、入魂致し候ふべし。さらばとて、立ち分

れしが、これ程見事なる武士は、つひに見侍らず。いかがりはて候ふにかと、語りけるに、そのころ、伊勢がもとへ、心安く、出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たりしが、この物語を聞きて、にじりいでつつ、掃部に向ひ、さても、只今の御物語承り、今更、昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、はづかしながら、われ等にて候ふ。かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候ふとて、その時、雙方の

鎧の威、馬の毛色を、一一いひけるが、一つも違はざりければ、掃部、おどろきつつ、さては、久しくて、逢ひ候ひて、本望に候ふとて、手前にありし盃を、方齋にさし、これを志るしにとて、腰の脇指を抜きて、ひきけり。それより、方齋が名、國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて、召し出だされたりとぞ。青木の武者振の見事なるは、さる事にて、阿閉が、彼がことをいひ出でて、名のりあひて、よろこびしも、又、伊勢が子の鎧の着ぞめに、掃部

を招ぎて、子のためにとて、武功の物語を望みしも、  
いづれも、さしたる事にてはなけれど、そのころの  
士風、武を嗜みしことは知らるべし。(駿臺雜話)

東照宮敵將の死を惜む 成島司直

天正元年四月、武田信玄入道、病死せしよし、御城下  
にも、とりどり、いひ傳へしをきこしめし、御家人等  
に仰せありしは、もし、この事實ならむには、いとを  
しむべき事にて、喜ぶべきにあらず。おほよそ、近き  
世に、信玄が如く、弓箭の道に熟せし者を見ず。われ、

年若き程より、かれが如くならむと思ひはげみて、  
益を得しこと多し。今、一介の使もて、その喪を吊は  
しめずとも、かれが死を聞きて、喜ぶべきにあらず、  
汝等も、おなじやうに心得べきなり。すべて、隣國に、  
強將ある時は、自國にも、よろづ、油斷なく、心を用ゐ  
るゆゑ、おのづから、國政もをさまり、武備もたゆむ  
ことなし。これ、鄰國をはばかり、心あるにより、かへ  
りて、我國安定の基を開くなり。さなからむには、上  
下、共に、安佚になれ、武道の嗜もうすく、兵鋒、次第に、

柔弱になりて、振興の勢なし。かかれれば、今、信玄が死に  
しは、味方の不幸にて、悦ぶことにてはなしと仰せありき。  
これより、御分國の者ども、いづれも、御詞を學びて、  
信玄が死を、をしき事とのみ、申しあへりとか。

又、或時、人には、向ふさすといふことなれば、その心  
がけも、自ら、薄くなるなり。信玄が、世にありし程は、  
味方にとりて、剛敵なれば、彼を向ふさす標的として、  
常に、武道をみがきしゆゑ、家卒までも、甲州の

戦には、いつも、粉骨せしなり。むかふさすといふことは、  
誰も、忘るまじき事ぞと仰せありしなり。孟子に、敵國外  
患なき者は、國、恒に、亡ぶといひし詞に、いとよく、似か  
よひし上意なり。

上杉謙信も、越後の春日山にありて、信玄が死を聞き、  
折しも、湯漬を喰ひて居しが、箸を投げすて、食を吐き出  
だして、さてさて、残り多き事かを。近代に、英傑といふ  
べきは、この入道のことなるを、今は、關東の弓箭柱なく  
なりぬとて、はらはらと、涙を落せり

といふ。謙信も、信玄と、常常、争鬪せしは、さるものにて、天下のために、人物の亡謝するををしみしは、同じ英雄の胸襟、かくあるべしと思はる。こなたの盛意も、同様の御事にやあらむ。(徳川實記附録)

眞の勇者

那珂通高

争を好むは勇に非ず、眞の大勇は、人と物を争はぬものなり。中納言伊達政宗の家に、原田左馬助とて、武勇雙ぶものなき士あり。その頃、政宗、後藤孫兵衛といふ剛のものをかかへたり。或日、孫兵衛、途にて、

左馬助に逢ひ、禮を施せるに、左馬助は、何事をか思ひ居りけむ。答禮をもなさで、行きすぎける故、孫兵衛、大に憤りて、その後、左馬助に逢ふ毎に、無禮の事のみ多かりけれども、左馬助は、少しも尤めず、うち過ぎたり。政宗、これを傳へ聞きて、孫兵衛の振舞こそ心得ね、速に、暇取らせむものをとて、左馬助を召し、その由を告げければ、左馬助、諫めて、某は、不肖なれども、今、士大將の任たれば、御家人の中には、某が髭の塵を拂はむと謀る者こそ多く候へ、いかで、

孫兵衛の如き、剛直の者これあるべき。抑も勝れたる武功は、剛直の士に非ざれば、成しえぬものに候へば、唯、その儘に召し仕はるるやう、あらまほしく候ふとて、ますます、孫兵衛を、よく遇したり。

孫兵衛は、その事を知るべくもあらねば、左馬助のはじめに似ず、よく遇するを見て、かかる諂者を、生けておかむは、伊達家の恥なり、斬りすてむとおもひつめて、左馬助が家に往き、對面を請へるに、左馬助は、何心なく、出でむかへて、これを爐邊に請ずる

に、孫兵衛、一禮にも及ばず、汝、先日の無禮をば、よも忘れはすまじ、覺悟せよと、爐上にかけて置きたる、湯釜を取りて、投げ懸け、短刀に手をかくるを、左馬助、まづ靜まられよとて、その手を押へて動かさず、孫兵衛、愈、怒りて、諂者めといひつつ、組み付かむとするを、取りて押へ、聲を勵まし、今、我我二人、貫きあひて、死にたらば、伊達家にて、武功の勇士は、外に、誰かある。主のために、かばかりの怒を、忍びかぬる汝とは、思はざりきといひければ、孫兵衛、始めて悟り、實



に尤なり。汝は、ごくより、此處に、心づきしよな。さては、我にまさりて、士大將の器量ありけるものを、今まで、無禮せしは、過なりとて、その後は、兄弟の如く、交りきとぞ。

この事、ただ、皇國のみならず、支那戰國の時、趙國に、廉頗といふ將軍あり。その頃、藺相如といふ人、秦に、使して、功ありければ、遽に、上卿になりて、位、頗の上にありしゆゑ、頗、憤りて、われ、趙國の將となりて、攻戰の大功ある事、擧げて、數ふべからず。然るを、

相如は、ただに、辯口を以て、わが上に居ること心得ず。かつ、彼は、もと、賤しき者なるに、我、その下にあるは、これに過ぎたる恥なし。今より後、彼に遇はば、必ず、辱めむといへり。

相如、これを聞きて、その後は、つねに、頗を避けて、彼の朝する時には、病ありとて、出でざりけるが、ある時、他に往きたるに、頗が、彼方より來るを見て、俄に、避け匿るるを、從者、止めて、かれは、君を誹りたる者なるに、君、彼を見て、匿れたまふは、勇なきに似たり。

といへば、相如いはく、われ先に強秦に使して、その王を朝に叱したる程なり。われ、驚下なりと雖も、何ぞ一の廉將軍を畏れむ。然れども、彼も一世の豪傑なり。顧ふに、秦の強きを以てしても、敢て、わが趙國に逼らざるは、吾等兩人のある故なり。然るを、今、兩雄、共に闘はば、勢、必ず、俱に、全かるべからずして、國の敗亡、目前にあらむ。わが、頗を避くるは、國家の事を先にして、私の讎をば、後にするなりといへり。頗、これを傳へ聞きて、大に羞ぢ、これにて、我を韃ち

給へど、背に荊を負ひ、相如の家に往きて、罪を謝し、終に、兩人、無二の交をなし、互に、力を戮せて、事を謀りしかば、趙國、愈、堅固なりきとなり。(洋洋社談)

勇將琵琶に泣く

室 鳩 巢

相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺は、豪健の勇將なりしが、或時、琵琶法師を招ぎて、平家語らせて、聞きけるに、未だ、語らぬ先に、琵琶法師にいひけるは、某は、ただ、哀なる事を聞きたくこそあれ、その心して、語り候へどありければ、法師、心得候ふとて、佐佐

木四郎高綱が、宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺  
あはれがりて、泣くこと志きりなり。さて、今一曲、前  
の如く哀なる事を聞きたしといひければ、那須與  
市宗高が扇の的を語りけるに、平家なかばより、天  
徳寺、又、落涙數行に及べり。

後日に、家臣の輩に、過ぎし日の平家は、いかが聴き  
つるといふに、家臣ども、尤も面白き事にて候ふ。但  
し、我らども、一つ、こころ得ぬことこそ候へ。前後二  
曲、共に、勇烈なる事にて、哀なるかたは、少しも候は

ぬに、君には、御感涙に咽ばれて候ふ。是は、いかがの  
事にて候ふにか。今に、不審なる事に、いづれも申し  
あひ候ふといへば、天徳寺、驚きて、只今までは、各を  
たのもしくおもひ候ひしが、今の一言にて、さてさ  
て、力を落して候ふ。まづ、佐佐木が先陣を、よく合點  
して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はず、寵  
臣の梶原にも賜はず、ぬ生、唆を、高綱に賜ひしにあら  
ずや。されば、そのかひもなく、この馬にて、宇治川を  
先陣せずして、人に先を越されなば、必ず、討死して、

再び歸るまじと、賴朝に暇乞して、出でける。その志を察して見よ、哀ならぬ事かほと、涙を拭ひつつ、志ばしありていひけるは、又、那須與市も、大勢の中より撰ばれて、ただ一騎、陣頭に出でしより、馬を海中に乗り入れて、的に向ふに至るまで、源平兩家、鳴を志づめて、これを見物するに、若し、射損じなば、味方の名折たるべし。馬上にて、腹かき切りて、海に入らむと覺悟したる心を察し候へ。武士の道ほど哀なるものは候はず。某は、殊に、戰場に臨みては、高綱、

宗高が心にて、鎗を取り候ふゆゑ、右の平家を聽くときも、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各には、あはれになかりきと申さるるにつきて思ふに、各の武邊は、只、一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにてはなきかと思ひ候ふ。それにては、たのもしからずこそ候へといひしかば、諸臣、皆迷惑して、辭なかりきとなり。(駿臺雜話)

盲目

松平樂翁

生れて目志ひし人の、五色を知るも、常の人の知る

と、同じことなり。目志ひし人に、五色は、いかなる色  
 とか思ふ、いひてみるべしと問へば、いはれぬまま、  
 さればこそ、知らざりけれとて笑ふ。いはねばこそ  
 あれ、黒きは黒く、白きは白しと思ふは、誰も同じこ  
 となり。常人とても、いかで、言葉にて、五色をいひわ  
 くるものあらむ。黒きはかくとて、わが髪をさし、白  
 きはかくとて、わが齒をさすは、たとへていふなり。  
 かくいふことは、目志ひし人もいふべし。目ある故  
 に、見て知り、耳ある故に、聞きて知ると思ふぞかな

しき。(燈前漫筆)

文盲

柳澤淇園

ある人、文盲なるものを異見して、世の交は、他の事  
 はいらず、唯、堪忍の二字を能く守るべしといへば、  
 文盲の人は、頭を傾け、かんにんとは、四字にて侍り  
 といへば、異見せし人いふ、愚昧の人かな、堪忍とは、  
 たへ志のぶと訓みて、二字なりといへば、又、頭を傾  
 け、たへ志のぶならば、又、一字殖えたり、五字となり  
 侍るべし、何と仰せありとも、我等は、四字と思ひは

べれば、四字にて、かんにんはいたし侍るなりといへるに、その人、又いふ、汝が如き愚昧の文盲は、實に論しがたし、人に似て、虫同様なり、おのれが儘にすべしと、大に憤りければ、文盲の人、笑ひて、何とも仰せあるべし、我等は、かんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも、腹立ち侍らざるなりとて、笑ひ居たりとぞ。その智には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。(雲萍雜誌)

讀書眼

滋野貞融

目上のあはれ

書見る眼は、ただ、あきらかならむことこそあらまほしけれ。一字の上にて、も、いたづらに、見過さず、そのあやにまどはず、うはべになづまず、その世、その時の、あるかたちを考へ合せて、底の心をあらはし、事の實を得むことは、眼あきらかならずしては、能はざるなり。眼は、あきらかにせば、いかにもあきらかにせらるべきものなるを、その見るごと、紙のうへにかぎりて、その餘を見るにおよばずば、あたら、年月を文机のもとに過したりとも、何の益かあら

ケンシキヲ  
高クシテ

む。さあらむ人は、見ずともあれかし。又、眼は、あきらかに、書は能く見る人の、その眼、ちひさく、低くして、わが世の榮をのみ願ひ、この眼を、大きく高くして、その得たらむ事のよしを、千歳の後に傳へむものとも思はざるは、なかなかに、書見ぬ方やよろしからむ。かかれれば、眼は、あきらかに大きく高かるべし。書函にのみ眼するは、かひなき學者にして、盲目の列になむ定むべき。(不繫舟)

史論

久米幹文

増鏡を讀み見るに、當時、文にあらず、武にもあらずと、世に聞えつる帝の御位のころより、思の外なる事ども出でてきて、さまさま亂れ初めつるは、大御心のたがひあればなりけり。あらましき平の太政入道が、鳥羽院におしこめ奉るを、憤り給ふあまりに、源氏の兵を召して、討たしめ給ひしより事起りて、木曾の冠者が、大兵を擧げて、北陸より攻め上りつるまぎれに、平氏は、安德帝を抱き奉りて、西國に落ちさすらひぬ。さて、王位空しければとて、法皇の御

心として、新帝を立て奉りしは、いみじき失錯と申すべし。平氏に擁せられ給ひし帝、京都におはしまさずとて、更に、新帝を立て奉るべきことかは。三種の神器をもち給はずして、御位に上り給へる例は、世にあるべからず、不祥と申すも愚なり。殊に、月輪關白が、自ら、臣を以て神璽コトナシになぞらへ給へと申せりといふも、無禮の甚しきものといふべし。さる間に、義仲あらましくて、朝廷、制しがたかりしかば、更に、頼朝の軍を召して討たしめ給ふに、義仲

亡びしかば、更にまた、平氏を討たしむるに、平氏破れて、安徳帝、海に入りて崩じましぬ。即ち、朝廷の、源氏をして、弑せさせ奉りつるに異ならず。かかる不倫の事ども出で來りしかば、皇太神の御靈代といつきまつりつる神劔の、世に隠れましつるもことわりなり。さて、新帝を撰び立て給ふ時、高倉の皇子たちを召し給ふに、第三の皇子は、むづからせ給へりとして、第四の皇子を立て給へるは、後鳥羽上皇なりといふ。幼き皇子のむづからせ給ふとて、引きこ



して、御弟の皇子を、撰び取り給へるも、長幼の序を失ひて、事の初め不吉なりといふべし。

さて、後鳥羽上皇、やや、御成長ののち、大權を執り返し給はむと、おぼしめし立ちしかども、後白河法皇以來、不倫不祥のこのみ續きて、人の心離れたれば、遂に、天下の權は、鎌倉に歸したり。さるを、上皇、察したまはず、一舉して、幕府を倒さむものと思し召しし故に、こと破れて、三帝、いと遙なる海島に出でまし給ふこととなりぬ。ただし、鎌倉より、大兵を京

御ぼしめし

カニシ

ツクアツクの時  
ドウテモツク

都におしのぼせて、勝敗を決せむと、軍だちする時、泰時、途より馳せ歸りて、父の義時に、このたびの事、死を以て、仕へ奉ることは承りぬ。されど、若し、鳳輦をさきだてて、御親征あらむ時には、いかにかせましと問ひければ、義時、暫く思案して、よくこそ問ひたれ、さあらむ時は、是非もなし、冑をぬぎて、罪を謝し申して、大命のまにまに、仕へ奉るべしと申したるぞ、殊勝なる。無學の東武士ながら、尊王の大倫は、いささか忘れざるに似たり。然るに、鳳輦も出でま

さず、宇治、瀬田の官軍破れしかば、京の兵は、猫のごとく、東の兵は、虎のごとくにして、一たまりもたまらず、承久の亂の後には、大權、長く關東に移りて、朝廷の昔の盛んなりしさまは、夢にも見るごとかたくなりなき。倫理の興敗、いかにおそろしきものにあらずや。（國文）

鎌倉

橋 南 谿

鎌倉は、東武通行の人の見る所にして、珍しからねど、又、またしく、その地に遊べば、昔のおもかげ、山川

わきては、神社佛閣に残りて、懷古の情にたへず。先づ、鶴岡の八幡宮に詣づ。その壯麗、男山に次ぐべし。佛寺には、建長寺など、最も大刹なり。鶴岡南面の階を登れば、大なる鴨脚の木あり。昔、この宮の別當公曉、將軍實朝公を弑したる所なりといふ。八幡宮の正面、一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居あり。その鳥居筋を眞直に下れば、由井が瀆に出づるなり。一の鳥居より、由井が瀆まで、十八町あり。凡て、鎌倉は、皆、山にて、地面甚だ狭し。わづかの谷のあひだあひだに、屋

敷屋敷を構へて、住居せしことと覺ゆ。その故に、比企が谷、扇が谷、大藏が谷などと、谷谷の名、甚だ多し。頼朝卿の屋敷跡は、八幡宮の東の方にあり。この地、すこし平坦なれど、三四町乃至五六町に過ぎず。その外の、谷谷の狭さ、推して知るべし。屋敷の、すこし上の方に、頼朝卿の塚あり。薩摩侯の寄附の大なる石の手水鉢あり。その岡の東の上の方に、薩摩侯の祖先の墓所もあり。このあたり、薩州より寄附のもの品品あり。八幡宮の東の方に、滑川とて、細き流あ

り、青砥左衛門、錢を落しし川なりといふ。その時の事は、郊外のやうに聞えしが、その頃は、今の世の如く、町家などはなかりしにや。義經の腰越も、鎌倉を去ること、京と大津とばかりもありぬべしと、兼ねては思ひ居りしが、僅に、一里ばかりにも足らぬなり。昔は、何事も微微たるものにて、鎌倉といへども、今の四五萬石の大名の城下程にもなきことと知られたり。

凡そ、鎌倉は、高山もなく、大河もなく、要害の地とも

いふべからず。唯、ちひさき山、數里四方に連りて、波濤の如し。その間の谷谷も、甚だ狭く、うち晴れたる平地は、絶えてなし。但し、源氏には、故ある地なれば、賴朝の、ここに府をひらきしにや。伊豫守賴義、鎮守府將軍に任じ、安倍の貞任征伐のために、東國下向の時、石清水八幡宮を、この地に勸請し給ひき。その前には、相模守に任じ、鎌倉に下向ありて、この所に、義家出生し給へりとかや。かく、祖先よりの由來あることなり。鎌倉と名づけし初めは、昔、大織冠鎌

足公、鹿嶋參詣のみぎり、この地の由井が濱に宿し給ひける夜、靈夢によりて、秘藏し給ひし鎌を、當所大藏山の松岡に埋め給ひぬ。この故に、鎌倉郡といへり。又、大藏山を鎌倉山とも名づけしなり。その外、神社佛閣、甚だ多く、古跡、舊蹤、種種の名ある所、ひと並びたり。あげてゑるすに暇あらず。(東遊記)

波蘭懷古 騎馬旅行の一節

ひと日ふた日は、晴れたれど、  
 三四日五日は、雨に風、

路のあしさに、	のる駒も、
ふみわづらひぬ、	野路山路。
雪こそふらぬ、	さえかへる、
嵐やいかに、	さむからむ、
こほりはりたり、	このあした、
おく霜志ろし、	このゆふべ。
獨逸の國も、	ゆきすぎて、
露西亞の境に、	いりにしが、
さむさはいよよ	まさりつつ、

ふらぬ日もなし、	雪あられ。
さびしき里に、	いでたれば、
ここはいづこと、	たづねしに、
聞くもあはれや、	そのむかし、
ほろぼされたる、	ほおらんど。
かしこに見ゆる、	城のあと、
ここにのこれる、	石の垣、
てらす夕日は、	色さむく、
飛ぶもさびしや、	鷓鴣の影。

榮枯盛衰 世のならひ、  
 そのことわりは、 知れれども、  
 かくまで荒るる、 ものとしも、  
 たれかは知らむ、 夢にだに。  
 存亡興廢 世のならひ、  
 そのことわりを、 うたがはむ、  
 人はひとたび、 來ても見よ、  
 あはれはかなき、 このどころ。  
 さきて榮えし、 いにしへの、

色よにほひよ、 今いづこ、  
 花のみやこの、 その春も、  
 まこと一時の、 夢にして。

墳墓

松平樂翁

去年、三城目といへる村の、景政寺へ詣でぬ。堂の後  
 へ行き見れば、石碑多くあり。その中には、いと苔む  
 したるもあり。又は、傾き倒れたるもあり。この頃、詣  
 でけむと思ふばかりに、かれ葉すくなき花など、供  
 へたるもあり。いでや、生きとし生けるもの、誰か、死

なからむ。陰陽、晝夜、四時の行はるるよりして、松の千とせのことぶき、朝顔の一日の榮、世にありとあるもの、始ありて終なきはあらじを、今更、なげくもよしなきことなるべし。されど、生はよく、死はあしく、誰も、死をさけて生につき、生を好みて死を悪まぬものはなけれど、遂に、ここに歸せざるものもなし。この地に埋れ、この石をいただきたらむ人の中には、病にかかりて、醫藥をきはめ、人人、看護しても、命きはまりて、かくなりたるもありなむ。老いたる

父母を残して、海山の恩をも報ぜず、孝子の恨を地下に残すもありなむ。夫に先ちて、同穴の契を忘れざる烈婦もありなむ。妻を残して、治命を變へざる丈夫もありなむ。やうやう、育てあげて、月よ花よと愛したる緑子の、露と消えしもありなむ。病を得ずして、鬪諍に身をほろぼしたるもありなむ。唯、最も、心ぐるしきは、凶年に遇ひて、食ふものも足らず、おほふ衣もなくて、一生を終へしもあらむか。又、病にかかりて、藥求むべき力もなく、あるは、鰥寡孤獨に

して、誰あはれむ人なかりしもあらむか。いと賢き男子の道知りたるが、人にも知られずして、草芥とひとしく、朽ちしもあらむ。誠に、憐むべきことなり。偶、ゆかりの人の詣づる事あるも、そは、ただ、うせにし日を思ひ出でて訪ふのみ、常、訪ふ人もなければ、卒都婆も苔むし、木の葉もふり埋みて、嵐のこととふも、月の宿かるも、いかで、なからむ人の心を慰めむ。年年の草のみ、心なく生ひ出でて、鳥の聲も、虫の音も、世の哀をや觀ずらむ。緑の苔もふりゆけば、後

は、恐ぶ人も、また、この地下に恨を含むやうになりゆきて、その人を恐ぶものさへ、稀にはなりぬらむ。終には、知る人もなく、古き墳は、埋れて、こと人の塚ともなり、田ともなり、また、野ともなりなむ。ただ、生死は、せむかたなし。飢ゑず凍えずして、命をつくし、賢き才あるも、そのほどに、人に知られ、世に出づるやうになりなば、また、かくまでは歎かじとて、寺の軒の隠るるまで、顧みしつ、歸りぬ。(關の秋風)

奢侈は禍亂の原因

雨森芳洲



世の中の、みだれむとする時は、かならず、所所に、盜賊おこるものなり。盜賊といふも、つねの盜賊にはあらず、百姓の年貢運上、年年におもくなり、上に訴へむとすれば、どがめをかうぶり、そのままにてありなむとすれば、妻子をはごくむべき様なきより、やむことを得ず、徒黨をむすびて、亂をおこすにいたれるなり。それより、さまさまの變故いできて、大藩、小藩、おもひおもひのころになり、大なるみだれとはなるなり。脾胃そこねたる人の、百病きをひ

おこりて、死ぬるが如く、懼るべきことの甚しきなり。志かるに、年貢運上のおもくなるもとをいへば、上たる人の、奢るによるなり。およそ、奢といふは、華美榮耀を好むばかりをばいはず、入るを量りて、いさす事を制するまつりごとなきをいふ。出入平均せざるか、大家、小家、ともに、定りたる年貢運上のみにては、償ふべきみちなく、遂に、民を志ひたぐるにいたらむ。國をたつるはじめは、多く質素にして、定りたる年貢運上にて、經費にあまりあれば、自然と、

仁惠のまつりごと行はれ、上ゆたかに、下やすく、めでたき世のありさまなれど、一葉すぎ、二葉すぎ、五十年たち、百年たちたる後は、いつとなく、物事おもしろく、結構になり、おぼえず、分限の外にいで、下を虐ぐるにいたる。一事をあげていへば、器物など、はじめは、素器を用ゐれども、いつとなく、彩畫を加へ、また、いつとなく、金銀にて装ふにいたる。衣服も同じ、はじめは、木綿を着、いつとなく、つむぎとなり、又、いつとなく、きぬとなり、それよりしては、緞子、ぐんちり

などいふ、もろこしのものをたふとび、又は、羅紗、猩猩、緋などいふ、蠻國の品を用ゐるに至る。かかる類、一事ならねば、いかでか、入る物の數、相つくなふべき。その間には、奢を禁ずること、まつりごとの要なれと知れる、明君賢相なきにしもあらねど、おほかた、小事、小物にのみ、心を用ゐ、大事、大物の、いつとなく、分限にこえたりといふに、心づかざれば、禍亂をすくふ益とはなりがたし。(多波禮具左)

儉約

高田與清

もの毎に、儉約を守るが、第一の陰徳なり。儉約を守るとは、金錢を吝むにあらず、行住坐臥につけて、無用のことをせぬをいふなり。例へば、喰ひ果たさぬものは、箸もて汚さぬがよし。箸もて汚せば、人、これを喰はずして棄つるゆゑ、徳を傷るなり。飲み果たさざるものも、口をつけぬがよし。紙を使ひ、水を使ひ、炭を使ひ、燈火をとすにも、無用に費さぬやうに、心をつくべし。人に薦むるものはともかく、己が心もちるは、必ず、かくあるべきなり。

むかし、京都妙心寺の開祖、關山和尚といふ人、六月の暑きころ、同侶四五人連れて、近江の湖の邊なる木蔭に、憩はれけるに、同侶、悉く、裸になりて、水中に飛び入り、立游、横游をして、様様に振舞ひけり。和尚は、僅に、口漱ぎ、手洗ひて、つくづく、同侶の様を見居られしが、同侶、水よりあがりて、あな涼しと言ひ合ふに、和尚、にがりて宣はく、かかる大湖の水なればとて、さまで、心の儘に使ひたらむには、徳に背くわぎなるべしと言はれたり。これ、多かる物をも、妄

にせざる心を教へられしなり。

又、同じ和尚の剃髪せらるるをりは、その剃る所ばかりを、少しづつ濡して、剃らせられければ、剃手、その由を問ふに、答へて宣はく、頭上、悉く、濡したればとて、剃りはつるまでには、度度、乾くべければ、無用の水を費さむことを厭ひて、その剃る所を限りて、少しばかりづつ、濡すなりといはれたり。これ、水は、人手もいり、又、さあらずとて、徒に費さむは、徳に背けばとの心なり。

この和尚は、萬事に、かく儉約を用ゐて、徳を積まれたれば、今の世までも、妙心寺は、大福地にて、その外の末派、皆、福寺なり。この和尚の陰徳の、その宗派に及べるなり。かかれれば、務めて、儉約を守れば、おのれ一代のみにあらず、子孫まで、その善業の報を譲りて、富貴ならしむるものなり。(積徳叢談)

富 賈

本 居 宣 長

世世の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富み榮ゆるを喜ばざるを、よきことにすれども、そは、人の誠

の心にあらず、多くは、名を貪る例の偽なり。まれま  
 れに、さる心ならむ者ありとも、そは、世のひが者に  
 こそあれ、何のよき事ならむ。理ならぬ振舞をして、  
 あながちに、願はむこそは、悪しからぬ程程に勤む  
 べきわざを、いそしく勤めて、なりのほり富み榮え  
 むこそ、父母にも、先祖にも、孝行ならぬ。身衰へ、家貧  
 しからむは、上なき不孝にこそありけれ。(玉勝間)

細き烟

堀 秀 成

炊ぐべき米盡きては、立つべき烟の末、心ほそくお

係  
 こそ  
 思ひきや  
 は  
 や  
 うつ  
 うん  
 結  
 礼る

ぼゆる朝もあり。たく柴のたえぬれば、ほかけだに  
 立てあへずして、さびしく過ぐる夕もあり。燈火の  
 油つきぬれども、あつむべき螢の節も過ぎ、積むべ  
 き雪も、いまだ降らねば、暗き夜を、ただに明すをり  
 もあり。酒は、飲までもあらねば、をりをりに、買ふ  
 時もあるぞ、信濃酒の濁りて、その味、そこなひたり。  
 されば、忍ひごころに、身の憂を忘るべくもあらず。  
 魚は、その鱗をだに見しこともあらず。野菜は、山里  
 のかひに、種種、おほかれども、みづから、耕さず、くる

る人もなければ、寒く残れる雪かきわけ、僅に、野澤の芹など摘み來て、飯のあはせものにはするなり。衾は、破れちぎれて、夜風、身に志み、衣は、ふるく、かつ、うすければ、朝夕、ひややかに幸なるは、劔に、いまだ、錆をおびざるあるのみ。かくばかりなれど、猶かのから人のいひけむ、四の友あらまほしくおぼゆるに、硯は、瓦なれば、思ふままに、墨もすりがたく、筆は、ちぎれて、文字の顔、老いさらぼへるに似たり。紙は、志ば志ば、盡くるままに、反故といふもののうら

を用ゐ、机は、童子の手習に疵つけたるものにて、その見ぐるしさいふばかりなし。されど、なほ、思ふ心を書きあらはすに、こと缺くべくもあらねば、これにても足るといはば足りなむ。ただ、かの烟の、をりをり、絶えぬるをばいかがはせむ。(客中文草)

修業論

松木直秀

何事によらず、業に就きては、怠るべからず。成效は急ぐべからず。唯、常に、心をここに存すべし。成效に急なれば、退屈の念生じて、事遂げ難く、業に就きて

怠らざれば、面白み、その間に生じて、成效の全きを致すべし。學問の道は、事業の中にも、最も難きものなれば、最も、このところに心得なくばあるべからず。然るに、學生の常として、初めのほどは、随分、能く、勉強すれども、やうやくにして、退屈の念を生じ、その甚しきは、終に、廢學するにも至る者あるは、畢竟、成效を望むこと急なるによれり。大工左官の如き、卑近の業すら、猶かつ、數年の年季トキを入れて、これを修むるイカシムにあらざれば、その大工なり、左官なり、一

人前の職工とは、なる事を得ざるにあらずや。まして、人の人たる道を修め、士大夫の師表たるべき學問の道にして、さも容易に、成就すべきものならむや。元來、人の精力は、かぎりあるものなれば、非常に、勉強するは、かへりて、非常の怠を生ずる本ともなるべし。非常の勉強を要せず、眠食、常を失ふことななく、職ある者は、職に従ひ、産業あるものは、産業を治め、さて後、暫時にても、暇ある時、心を專一にして、修業すべし。朝に温めて、夕に冷すことなかれ。昨は勤

めて、今は怠ることなかれ。かくのごとくにして、日に變ずることなく、月を累ね、年を積み、て、やまざらむには、餘業に學ぶ者といへども、成學の効驗、かならず、見るべきなり。事業中、最も難しとする學問の道すら、すでに然り。まして、その他のごとき、この心得を以て、勉めたらむには、何事をかなし果さざらむ。(琴園漫錄)

毀譽

三浦安貞

毀譽は、人の大節なり。然りといへども、世、舉りて譽

むるも、必ず、察すべし。人、舉りて毀るも、必ず、察すべし。況や、一人はほめ、一人はそしるをや。たとへば、訟事あらむに、兩方、理ありと思へばこそ、互に、いひつゝのりて、やまざるなれ。これを奉行のさばかむに、とにかく、一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は、奉行をほめ、負けたる人は、そしるなり。又、あしき人なりとも、それにともなふ人は、これをよしと思へばこそ、交るなれ。わがよしと思ふをば譽め、わがあしと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりて、そ



の人の善悪も分ち難し。おなじ一盃の酒ながら、上戸は、酔ひて、おもしろきものなりといひ、下戸は、酔ひて、苦しきものなりといふ。まして、人傳などにきかむことは、覺束あきづなきことなり。

昔、人ありて、その子こを、ある寺へ遣し置きけるに、暫くありて、逃げ歸り、住持のことを毀りけるは、我に、月代剃れといひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうの、わきてあしとて、いたく叱られ、又、ある時、わが厠に行きけるを見て、何とて厠へは行きし、不届

なり、向後、厠へ行くべからずといひ、その後、朝飯たくとて、味噌をすりけるに、これも、味噌をするが聞えずとて、理不盡の次第、殆ど、困窮におよびたりとて、語りけるを、親聞きて、さりとは、出家にも似合はざる事なりとて、いそぎ山に登り、右の事どもを語りけるに、住持聞きて、いやいや、さやうのことにてはなし。常常、髪よく剃る故に、この頃、そらせけるに、いたく眠りて、これ見たまへ、かやうに切りこみ候ふとて、きずを見せ、そのうへ、厠も、常の厠へは行か

で、奥なる隠所へ行き、味噌も、常の味噌をさしおき、客へ遣ふべきをつかひし故、これらの指南をこそ、かへすがへすも、いたしつれといひけるにぞ、親も理に伏しけるとぞ。

信濃の國、その原といふ所に、木あり。遠くより見れば、箒の形の如し。よりて、これを箒木といふ。されど近づきて見れば、箒に似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠くより見聞くと、親しく見聞くとは、多くは、この箒木の類なるべし。凡そ、人の物を批判する

も、我好む所を、譽むるものなり。俳士に、歌人の評判せさせ、日蓮宗に、眞宗の評判せさせむに、いかでか公論あらむ。同じ道を、二人して行かむに、一人は、健にして、この道近しといひ、一人は、疲れて、遠しといはむ。これ、道に違あるにあらず、心に、違あればなり。たとへば、義經の事を論じて、義經をよしと思ふ人のいはむには、この人、誠に、幼より、常人にてはおはしまさざりけり。共に、天を戴かざる讎を報ぜむと、夜夜、院をいでて、劔をうち、遙に、秀衡が人となりを

見て、これにより、終に、飛ぶ鳥も落ちむばかりなる勢の平家を、二三年のうちに、攻め亡して、亡父の耻辱をすすぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再び、たえたる源氏を興し、兄頼朝を、天下の武將と仰がしめたりといひ、又、義經に不満の人は、なるほど、この人、戦争に、一とほり、自由を得たる人ながら、平氏を亡し、恣に、時忠の女を納れ、梶原景時と詮なき口論、大將たらむ人の志わざに似ず。腰越より追ひかへされしも、いはれなきにあらず。志かるを、都に逃れのぼ

り、頼朝追討の院旨を申しうけ、芳野山にて、一人の靜にわかれかね、兒女子の涙を志ぼられしなどいふ。かく、よしと思ふ人の論と、あしと思ふ人の論とは、まことに、雪と墨との差あるなり。そのあしきところを捨てて、よき所を取る、これ、人をもちゐる道なり。そのあしきをばあしとし、よきをばよしとす。これ、公の論なり。また、分分、相應につきて言ふ事あり。鼠を、甚だ大なりといふも、牛の小きには及ばじ、蛇を、甚だ短しといへども、蚯蚓よりは長かるべし。

故に、人をよしといひて、譽むるも、あしといひて毀るも、その場合を考ふべきことなり。(梅園叢書)

不言の教

藤井高尙

神代の史に見えたるやう、よき神は、かりそめにも、偽言はいひ給はず。大穴牟遲神の兄弟の八十神は、あしき神にて、志ば志ば、偽言いひて、大穴牟遲の神を欺きて、からきめ見せ給ひしに、はてはては、大穴牟遲神は榮えまして、八十神は衰へ給ひぬ。人の世の中のさまも、さやうにて、偽言いひて、人をはかれ

ば、そのをりは、よきやうなれども、終には、身のためあしくなるさま、誰も見て知れることならむ。これによりて思へば、心の誠こそ、上なく貴きものにはありけれ。孔子も、これをいみじき事として、かへすがへす、いはれたり。論語の中に、主忠信といふこと、志ば志ば見え、あるは、人の誠なきは、車に牛馬をかくるところなきやうなりとたとへて、さては、車のやりがたきが如しといひ、あるは、君子といふは、信もてなすものぞともいひ、中庸には、誠者天之道也、

誠之者人之道也といへるなどを、思ひわたして、前にいへる神代のふるごとちに、合せ考へて、人の行は、誠をむねとすべきことを知るべし。佛も、さやうに思はれたるよしにて、孔子の、文、行、忠、信の四つもて、教へられたる如く、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五つを、いみじく、あしき事として、世の人に、なせそと教へられき。我國の神代のやう、古のことども、思ひあたすに、誠なき神も人もありつれど、そは、いといと、稀なることにて、おほかたは、誠あるさまなりし

は、おのづからの國振なり。さるからに、殊更に、偽な  
いひそと、ことわりおく教も聞えざりき。ふるごと  
に、言あげせぬ國といひしは、このことなり。されど、  
史のうへに、いつはりごととして、人をはかるものは、  
去ばしこそ時めけ、天地の神の、咎め給ふすぢなれ  
ば、やうやうに、衰へてあしく、誠あるものは、さびし  
げなれど、神のこころよせ給へば、遂には、榮えて、よ  
くなれる事ども、あまた、見えたり。これ、我國のおの  
づからなる教にして、他の國には、また、かかる教は

なかるべくや。(松の落葉)

板倉重宗

新井白石

この人は、天下の稱するところにして、その職にありし時の名譽、あげて數ふべからず。今、その一條を志るさむに、重宗、職に任じて後、決斷所に出づること、に、その西面の廊下にて、はるかに、拜し、また、決斷所には、茶磨ひとつをすゑおき、あかり障子をひきたてて、そのうちに坐し、手づから茶をひきなながら、訟を聽きわかつを例とせしが、人皆、この事どもを

不審しあへり。されども、問ふこともえならずしてありしが、はるか年経て後、ある人の問ふに、答へて、決斷所に出づる時、西面の廊下にて、遙に、拜することは、愛宕の神を拜するなり。多くの神の中に、殊に、愛宕は、靈驗あらたかなりと聞きしほどに、所願ありて、かくは拜しぬ。その所願といふは、ほかの事ならず、今日、重宗、訟をことわらむに、心におよばぬほどの事あらじ。さるに、若し、あやまりて、私の事もあらば、たちどころに命を召させ給へと、日に、祈誓

するにて候ふ。また、訟をわかつに、あきらかならぬは、わが心の事にふれて、動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は、おのづから、動ぜぬやうこそあらめ、重宗、それまでの事は、なりがたく、唯、我心の動くを、静なるを知るには、茶をひきて試みるが最もよきなり。そは、心定りて、静なる時は、手もそれに應じ、磨のめぐること半にして、きしられて落つるところの茶、いかにもこまかなればなり。茶のこまかに落つるときにいたりて、我心も動かずと知り、ここに、

始めて、訟を分つにて候ふ。又、あかり障子を隔てて、訟をきく事は、およそ、人の容貌には、見るやがて、にくさげなるあり。あはれがましきあり。まことしきあり。奸カウしきあり。その品多くして、いくらといふ數を知らず。見候ふところの、まことしと思ふ人のいふ事は、まことと聽かれ、かたましと見る人のなす事は、直くしても、皆、偽と見ゆ。あはれがましき人の訟は、枉げられたるところあるよと思はれ、にくげなる人の争ふは、ひが事ならむと覺ゆ。これ等のた

ぐひは、我目に見るところに、心をうつされて、彼等言葉を出ださぬうちに、はや、我心のうちに、邪ならむ、正しからむ、直からむと、思ひ定むる程に、訟のこどばをきくにいたりて、我思ふ方に、その事を聽きなす事おほし。訟の成るにおよびては、あはれがましきに、悪むべきあり。にくげなるに、あはれなるあり。まことしきに、いつはり、奸しきに、直き、この類、ことにおほし。人の心の知りがたき、容貌を以て定めむこと、叶ふべからず。古の訟を聽くに、色を以て聽

くことあり。そは、おほはるる所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見るところにつきで、心おほはるること多し。又、さらぬだに、訟の庭に出でむは、おそろしかるべきに、まして、生殺をつかさどる人を見ては、まばゆく、いぶせて、おのづから、いふべき事をもえいはで、罪にも科にもあふ人あらむと思へば、それがため、互に、顔を見もせぬには、志かじと、かくは、坐をへだつるにて候ふと語れりとなり。かく、日に、神明に祈りて、私なからむことを誓ひ、まづ、



我心を内外より養ひて、正しくなして、その後、訟を聴き、政をなすなど、これ皆、君に仕ふる誠よりいでしことにて、古の順良の吏といふとも、これには過ぎざるべきなり。(藩翰譜)

江戸時代風俗の變遷

太宰春臺

我父は、寛永の中頃に生れて、八十八歳にて、享保の中頃に終れり。大猷院殿、嚴有院殿の御世を経て、その時のことを、常に語りつれば、われ、幼より聞きて、耳に熟せり。われは、延寶の終の年に生れて、常憲院

殿の御代よりこのかたは、まさしく、この身に歷つれば、幼稚の時より、今まで、五十餘年の事をば、目に見たり。父の語り聞かせつると、我、まのあたり、見つるを、おもひつづくれば、百年の變遷、歴歴として、目の前にあるがごとし。人と物語する序には、昔の事どもを思ひ出だして、或は笑ひ、或はなげき、かつは、をさまれる御世に生れて、干戈の昔を知らず、安くいね、靜に起きて、明し暮すことをよるこび、又、事ありし時にあはずして、猛虎も鼠となり、寶劍も鈍

となる事をぞ、いきどほる。かくて、この世のをさま  
れること、久しきによりて、上より下まで、心弛みて、  
ひたすら、歡樂のみを營む故に、舊き事は、をかしか  
らずなりて、新しき事を、めづらしと、もてはやすほ  
ごに、人の詞、身のさまより始めて、衣服、器物、屋づく  
りまで、昔にかはりゆけば、まして、人間種種の儀式、  
或は、遊宴の樂など、新しき事ども、年年に、出で來り  
て、ふるき事は、いつとなく廢れはつ。大かた、舊き事  
には、よき事多く、新しき事には、よき事すくなし。風

俗の移りかはること、目の前に歴然たり。その中に、  
昔と今と、寒暑の如くかはれるさへ、怪しと思ふに、  
冠を履にはき、履を冠に着くるやうなる事あるこ  
そ不思議なれ。つくづく、百年このかたの風俗を  
思ひくらぶるに、よその事をばおきて、江戸の人の  
風俗こそ、昔には變りたれ。わが親しき者の中に、慶  
長、元和の頃、生れたる者、男にも女にもありて、寛永  
の頃を、年の盛にて經たりといふ。男は、冬、章のうち  
かけ、章の袴を美服とし、女は、紫の章の襪子をはく

を、よきけはひとせりといふ。その襪子は、わが幼き時までも、残りてありしなり。婦女の帯は、金襴を美麗の限とし、黒地に、梅、櫻、松などを、どころどころに織りつけて、これを鉢の木の帯と名づけて、珍重しけり。廣さ、鯨尺二寸ばかりの紙を心として、綿などいるることなし。四月より、八月まで、婦女の禮服に、錦にて、廣さ、鯨尺の八分ばかりなるを、うしろに結びて垂るるを、附け帯といふ。今の附け帯は、昔の常の帯よりも廣し。今の人に、昔の事を語れば、そらご

とと思ひて、つゆ眞とせず。これらは、我、まのあたり、見たりしことにて、つくり事にあらず。ふるき事知りたる人あらば、尋ね問ふべし。すべて、男女の衣服、昔は、極めて、質素なりき。男子も女子も、十四五歳までは、長き袖を着くるに、丈は、鯨尺の一尺七、八寸を極とせしに、貞享の頃より、二尺ばかりになり、それより、やうやう、長くなりて、近き頃は、二尺四五寸になりぬと見ゆ。婦女の帯も、貞享、元祿の頃より、漸く、廣くなりて、今は、鯨尺にて、八九寸に及べり。綿を心

として、袴の如くす。男の肩衣といふは、昔は麻の幅、鯨尺の八寸ばかりなりしに、貞享、元祿の頃より、幅一尺に及べり。寛永の頃までは、婦女は細き麻繩にて、髪を束ねて、その上を、黒き絹にて巻きしに、その後、麻繩をやめて、紙にし、越前國より、粉紙にて、元結紙といふ物を造り出だしてより、海内の婦女、皆、これを用ゐる。それより、絹にて巻く事もやみぬと、我父、まさしく、これを見て、語り聞かせつ。今の人、聞きては、眞とせず。およそ、男女の髮形、我等が見および

てよりこのかたも、幾かはりかまつらむ、今は、昔の形も残らず。昔の婦人は、髪多く長きを、たけにあまゐるなどいひて、ほめたりしに、近き頃は、髪のすくなく短きを、よしとする風俗になりて、髪多き女は、髪の内を、或は、きり、或は、そりて、すくなくす。この風俗は、京の婦女より移り來れり。この事に限らず、すべて、男女の風俗、詞づかひ、物の名まで、近き頃は、京に似たること多し。京は、公家の外、工匠、商估のみなれば、人の心、柔懦にて、利にさとし。江戸は、武家の都な

れば、あづまうどの心、粗暴にて、利にうとし。然るに、三十年このかたは、江戸の人、京の風俗を學ぶゆゑに、武士の心も、昔にかはれり。唯、京の婦女の、昔よりかつぎするのみこそ、いまだ、江戸に移らぬ。江戸の婦女の、外に出づるに、昔は、きままとて、黒き絹にて、頭面を包み、目ばかりをあらはしけるが、その後、綿にて頭面を包みしは、わが二十あまり、寶永の頃まで、志かなりき。今は、ちひさき綿を、頭上にいただけたるのみにて、面をばうちさらし、はれやかなる顔

にて、道をゆくさま、おもはゆげにも見えぬ。男は、面をあらはすべきものなるに、この頃は、編笠の、肩の上までかかるをかぶるは、珍しからず。冑の如くなる帽子をかぶりて、面をかくすもあり。常の頭巾に、覆面の如くなる物をつづりつけて、目ばかりをあらはして、道をゆくもあり。そのさま、昔の女のごとし。人目を恐ぶ者の、多くなりたるにや。又、この頃の男は、小袖の裏を紅にし、或は、紅のはだぎぬを、袖口長にして、腕をまどふばかりに、ひらめかす者多く

見ゆ。女は、かへりて、縹の白き裏などを着るなり。これらは、男女所をかへたりといふべし。(獨語)

風流

松平樂翁

風流といふは、草木の花のかをりの如し。花は文にて、實は質なり。花もよく、實もよくば、事足れども、その上にも、このかをりありてこそ、人も尊びぬれ。花實もあしくては、かをりのみよしとて、何にかはせむ。風流にのみ流るるものは、實用に疎く、事務にくらくして、遂に、聖教の罪人となるも、少なからず。そ

の風流は、わが程を得るを尊ぶなり。位、尊き者は、雨雪の山水、見まほしくとも、従者の勞を思ひてゆかず。よすがら、月見むとても、いぬる時の程を亂さで、戸おし立てぬる、これを、程得たりとは言ふなるべし。王侯より、農商に至るまで、わがなすべき事をなしてこそ、かの風流のかをりもかぐはしかるべけれ。ことに、金多く費して、風流の器を得むとし、遊藝などに費して、顧みざるなど、その愚さ、いはむかたなかるべし。もとより、游藝、舞樂、管絃の類の、益なき

事も、なすべき事をなしての後は、心にまかせなむ。遊藝は、無用のこと、無益の事として、にくむは、甚しくやあらむ。人は、只、益ある事のみするものかは。益なければとて、毛髪は、なくてもありなむとはいはじ。天下のひろき、無用の用あり、無益の益あり。なごて、一方にのみいはむ。その弊を見て憎むは、醉狂を見て、酒を憎むが如し。これも、亦、甚し。(花月亭筆記)

酒 戒

松 平 樂 翁

酒呑むこそをかしけれ。されども、今の世、うち寄り、

むらがり飲むは、賓主の禮をも失ひ、手をおさへて、強ひて飲ませ、肴はさみて投げちらし、後には、席上に、酒うち流しなどするぞわるき。その強ふる人は、いたけ高になりつつ、詞あらく、いきまきて、飲まずば、とくとく、この席を退出せよ、飲みたらば、許してむなごきこゆ。強ひらるる人も、うち腹立つる風情にて、われ一人にかく強ふるぞ奇恠なる。人の飲まざるうちは、いかにいふとも、飲むまじといひて、あらげなるをのこ二三、人いかなる國の存亡安危に

かかる事かとも思はるるまで、かたみに、眩うちほり、ひたひに筋出だし、顔あかめなど志たる、似氣なく愚なり。その中に、酒仙ともいふべきが、この盃は、飲むに足らずとて、顔かくるるばかりの盃とり出だし、鯨の水吸ふやうに飲みたれば、皆めでたき飲みやうとて、戦の場にて、功名したらむが如し。又、酒うけて、盃のはし少し見ゆれば、いと賤しきわざかな、満つるばかりに受け給へといへば、また、いたく辭して、うけがはずよし、その酒増して受けたらむ

とて、さばかりの事もあらじを、にがにがしう辭するも愚なり。瓶子の酒のかほりしを、一つのみて後、人にすすむるは、酒の味を試みるなればよし。主人より、強ひて、瓶子のかほりしぞ、飲み給へといふは、ことわり知らぬにてぞありける。かかる酒狂の筈は、ここかしこ、五六人程づつ、つどひ合ひて、定りたる賓主もなし。あるは、倒れふして、病者となるもあり。あるは、椽のほどりへ這ひ出でて、えもいはぬ事志たるもあり。あるは、席も逃げ出でて、大路に寝ぬ



るもあり。又は、脛の毛見ゆるばかりかかげて、杯盤のあひだあひだをどりこえて進むもあり。酒のみがてにして、逃げまよふを、袖引きすゑて飲ますれば、眉ひそめ、目をとぢ、胸うち叩きて苦むもあり。年若き男、初めての程こそありけれ、後には、柱にうちより白銀のきせる、額ふすぶるばかり、空さまにあげてのみ、又は、指の先に横へて、水車の如くまはし、つらに手なごあてて、謠うたひつつ、はるか隔りし睡壺へ、つばきとばすも、われは顔の風情なり。又は、

二人さし向ひて、かたみに、指のべかがめ、何やらむ聲高にののしりて、勝負争ひ、又、聲のかぎりうたひ、顔厚きこといふもあり。興をせまほしくや思ふらむ、わが拍子のあしと、姿のあしとさもうち忘れて、立ち舞ひつつ、盃ふみわり、肴ちらすもあり。ただ、下戸は、かたはらに、怖れたるさまして、目のみ動かして、折あらば逃げむとするは、この中の智者ともいひつべし。醉泣する者は、過ぎ來し事なごいひ出でて、雨雫と泣くを、酒のむ程に、この坐を立ち去れよと

いへば、酔はぬ者を、酔ふといふぞかなしきとて、ひた泣に泣くを、酔ひて腹立つ者、聞きて、この祝の席に、涙こぼすぞ心得ぬ。希有の振舞するならば、この筵には、つらなるまじと、いららかにいふを、酔ひて笑ふもの、うち聞きて、何の悲しき事も、ふくるる事もなきを、あの涙おとす風情、怒り詈るさま、いとめづらしとて、腹うち抱へて笑ふ。いづれも、酒の上なれば、是非いはむやうもなし。ただ、尤もさる事なり、きはまりなき道理なりといひて、慰むる人の心の

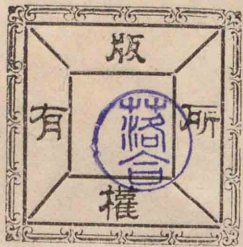
愚さよ。あけの日、その事いひ出づれば、昨日、させる事ありしにや、いと耻しとて、知らぬさまなるも、心得のうととしさ、思ひやるべし。暑き日も忘るとて、盃傾け、汗うち流すも、いかなる事にか。憂をも忘るとはいへど、酒によりて過をなし、恥を得て、家を亡し、身を失ふもあるなれば、憂を添ふるものどやいはまし。昨日、酒のみて、今日は、心地死ぬべくありとて、枕により、粥すすりて、酒の匂をも嫌ふまま、下戸にやなりなむと見れば、程なく、始めにかへるぞ

悲しき。(燈前漫筆)

中等國文讀本卷三終



明治三十二年一月廿五日訂正六版印刷  
明治三十二年一月三十日發  
明治三十二年三月九日 日 文 部 省 檢 定 濟 行



著 者 落 合 直 文  
東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發 行 者 三 樹 一 平  
東京市神田區錦町二丁目十番地

發 行 者 鈴 木 友 三 郎  
東京市神田區三河町二丁目十六番地

印 刷 者 吉 岡 嚴 八  
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市神田區錦町二丁目 明治書院  
關西專賣 大阪市東區備後町四丁目 吉岡平助

定價表	
一、二	各貳拾錢
三、四	各貳拾錢
五、六	各貳拾錢
七、八	各貳拾錢
九、十	各貳拾錢





